



# 水の無法

2020/9/16

井上明彦

直径 8cm のガラス球は、  
人の目には見えない床面の微妙な起伏を感知し、  
どの方向にどのように動くかは予想不可能である。  
それは、グリッド（条理）が表わす人間のコントロールを逃れ、  
大地の起伏に沿って流れる水のように。  
崇仁小学校に残る「水平社宣言」の「水平」の文字が  
黒板に浮かぶ。

水は、人と生命を養いながら、同時にそれを奪う。  
ときに人を惹きつけながら、ときに人を呑み尽くす。

特異な物質性と重力のみに身を委ねて動く無法の水は、  
本質的な制御不可能性によって、人類の文明を左右してきた。  
水は人間を取り巻く自然のエッセンスを示す。

表紙：  
《Tracing Suujin》  
井上明彦＋二瓶晃  
Still moving, 2015  
元崇仁小学校

水の特異性は**水素結合**に由来する。

水分子の H と O は、それぞれ [ + ] と [ - ] の電荷を持ち、隣の水分子の [ - ] や [ + ] を引き寄せる。この水素結合によって、分子どうしが互いに結び付いた強いネットワークが形成される。このネットワークの性質が他の物質にない水の特異性を生み出している。

### (1) 特異な状態変化

固体、液体、気体の三相の変化が日常生活で見られる。

### (2) 固体状態の方が軽い

4°C で最も密度が大きく、氷るとき一気に密度が小さくなる。湖面が凍結しても氷の下の水温は 4°C 近くで凍らない。だから生きものも生きられる。

### (3) 温まりにくく冷めにくい

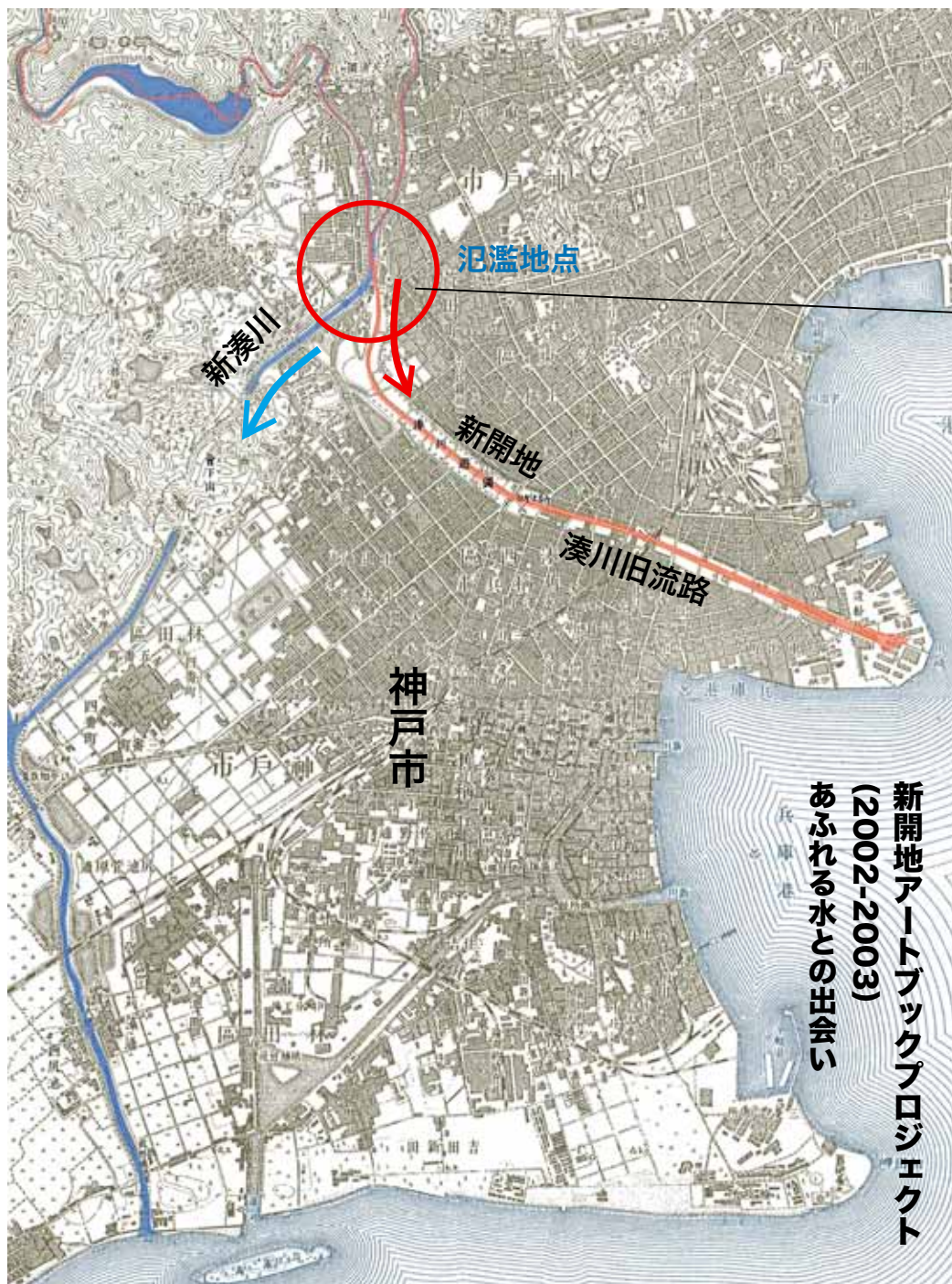
解けにくく（融解熱が大きい）、気化しにくい（気化熱が大きい）ことで地球の温度変化を和らげる

### (4) 表面張力が大きい

親水性のある物質と接触すると相手と密着し、すき間に浸透しようとする＝毛細管現象。

### (5) いろいろなものを溶かす

水ほど自分とは性質の違うものを数多く溶かす液体はほかにない。



あふれた水は、元の流路をたどろうとした。  
水は自分の道をわすれない。



鴨川大洪水 三條大橋の破壊状況 (昭和10年6月29日)  
京都地方は28日夜来より未曾有の豪雨に見舞われ、29日鴨川が氾濫した。



鴨川氾濫寸前 2013年



## レオナルド・ダ・ヴィンチ の洪水幻想

自然の「観察」を根底において芸術・科学・技術を貫く活動を展開したレオナルド・ダ・ヴィンチ (1452-1519) にとって、「自然」の本質は「たえず変化する運動状態」にあり、それを代表するのが「水」であった。

彼は水の考察を何度も『水の書』にまとめようとし、章立ても考えたが、ついにまとまらなかった。



レオナルド・ダ・ヴィンチの手稿から、老人と橋脚下の乱流

だが晩年、大洪水による世界の没落のヴィジョンを集中的に描いている(ウインザー紙葉の素描群 11 枚)。



レオナルド・ダ・ヴィンチ『大洪水』、紙に黒チョーク、インク、ウインザー紙葉 12380



レオナルド・ダ・ヴィンチ『大洪水』、紙に黒チョーク、インク、ウインザー紙葉 12377



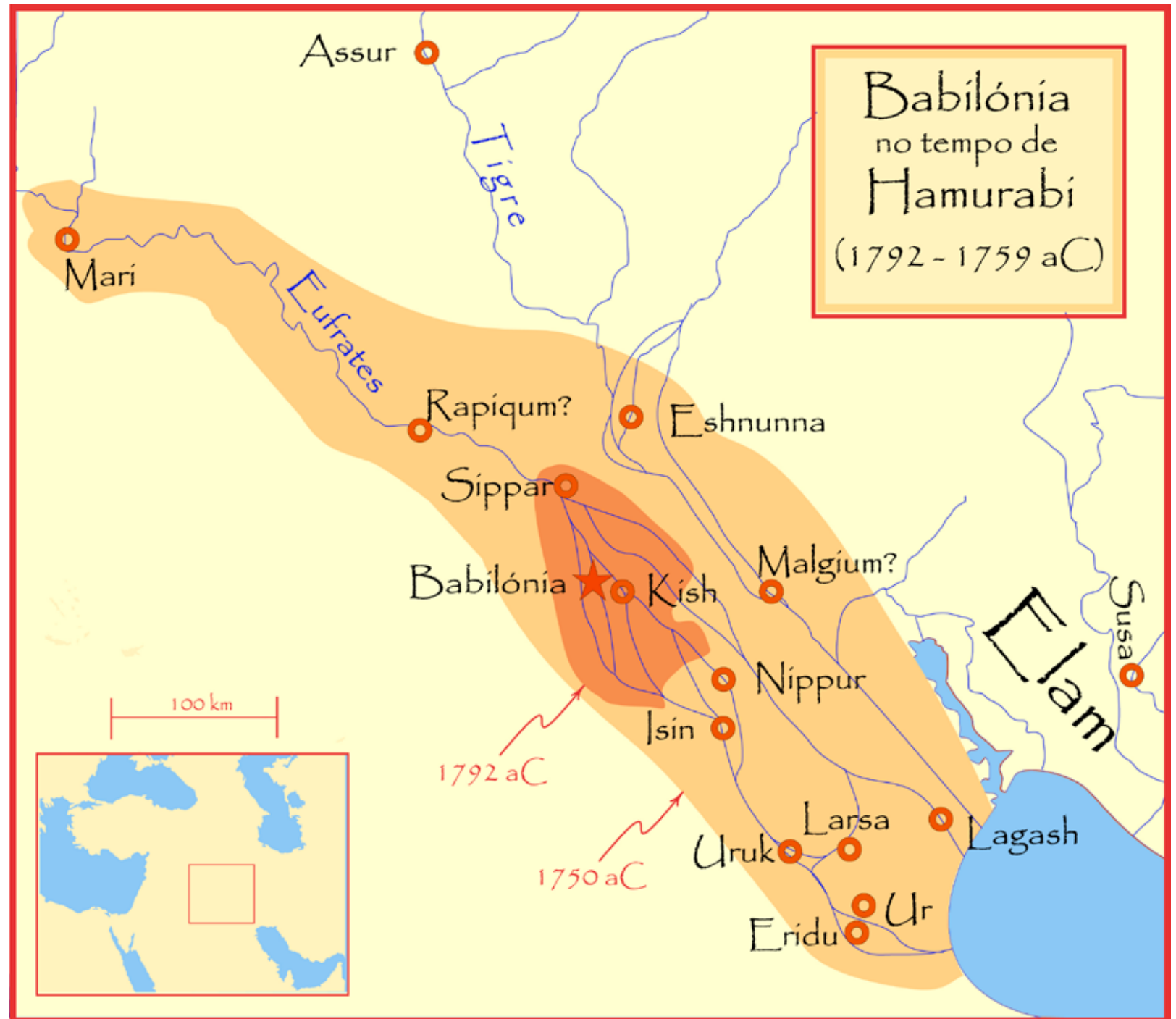
ミケランジェロ『大洪水』システィーナ礼拝堂

レオナルドの洪水幻想は、ミケランジェロがシスティーナ礼拝堂の天井に描いたノアの洪水のような宗教的な意味合いは薄い。ただあふれる水の制御不可能な破壊力とそれによる世界の崩落のイメージだけをこれまでの水の運動の考察を集約して描ききっている。

荒れ狂う水による世界の崩壊のイメージは世界各地の神話にあり、水を求めて川辺に住んだ人類が実際に被った洪水とその記憶に根ざしていると思われる。

ユーフラテス川をまたぐ古代都市バビロニアもたびたび洪水におそわれた。

「バベルの塔」のモデルといわれるジグラット「エ・テメン・アン・キ É-TEMEN-AN-KI」があった。



## 洪水・河原・河原者

水の脅威にたえずさらされる河原は、土地ならざる土地であり、無税であることや水が得やすいことから、牛馬の屠畜や皮革加工、屍体処理、井戸掘り、庭作りなどの職能を持つ人々が生業を営み、「河原者」と称された。(語の初出は、平安時代の『左経記』長和5(1016)年)。

河原＝この世とあの世の境。さまざまな人やモノが行き交う場。

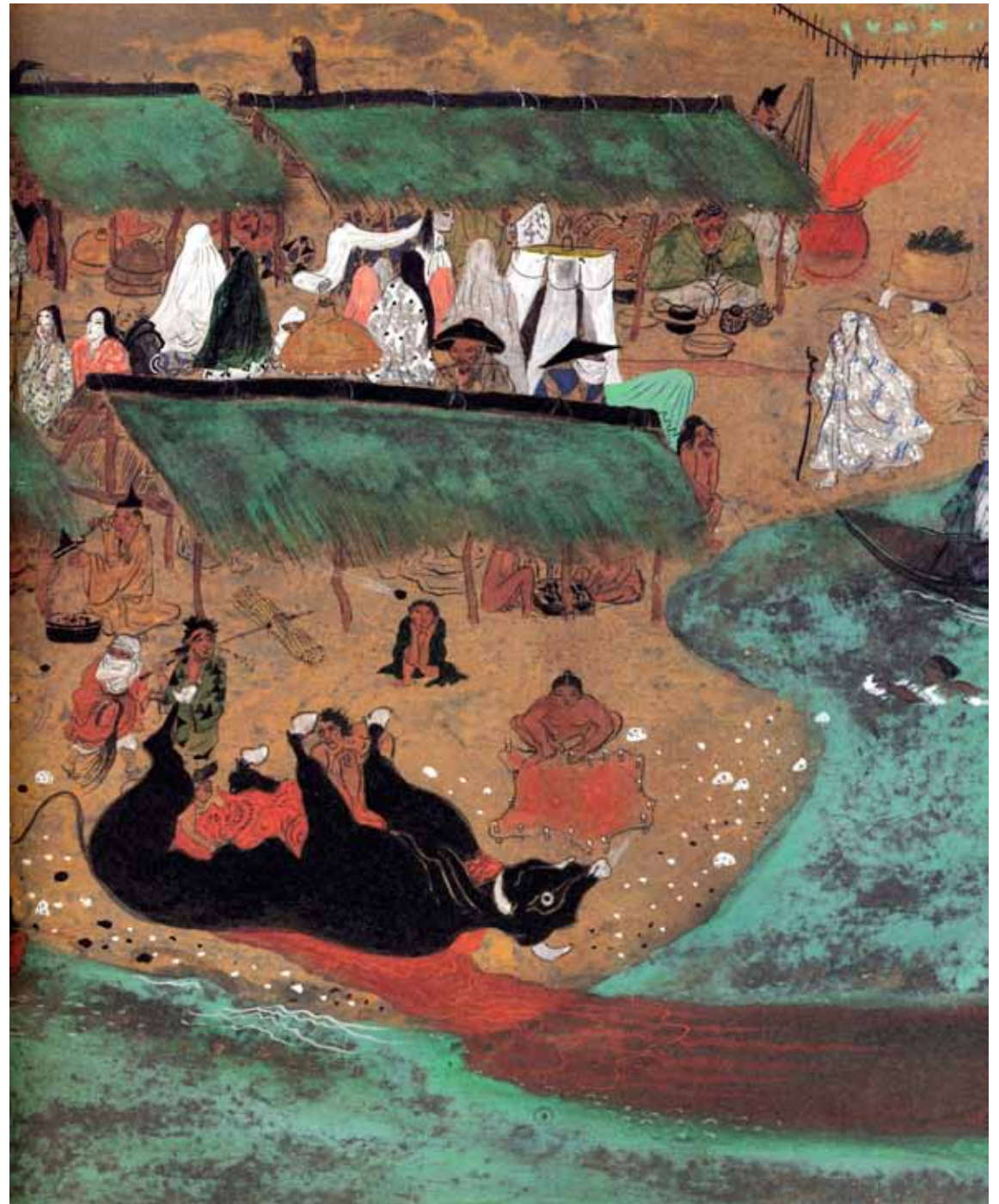
異なる次元のものが交換される場である河原では、声聞師や陰陽師、勧進聖が読経、曲舞、卜占などを行い、歌舞伎や能につながる猿楽等の呪術的芸能者が活動した。

→通常土地と異なる秩序をもつ地をよりどころとする人々は差別・排除される。

河原＝「無縁」の場

「文学・芸能・美術・宗教等、人の魂をゆるがす文化はみな、この＜無縁＞の場に生まれ、＜無縁＞の人々によって担われているといってもよかろう」

——網野善彦『無縁・公界・楽～日本中世の自由と平和』



網野善彦監修・司修絵『河原にできた中世の町』より



『一遍聖絵』より四条釈迦堂での踊念仏。水が見るものと見られるもの、此岸と彼岸を隔てる。

## 河原者（被差別民）の橋づくり技能

「幕末の洪水対策と被差別民～近年解読の進む『今村家文書』から」  
小林ひろみ（世界人権問題研究センター研究員）  
『GLOBE』2020年7月号より

近世に入り、川床の上昇が進んだ鴨川は、弘化～嘉永年間(1844～52)には、1～2年毎に大洪水を繰り返し、田畑の浪水、家屋の浸水や流出、橋の流出、人命の犠牲をもたらした。そのため、早急の対策として川底の土砂の浚渫・堤防の修理と補強、川幅の拡幅工事などが行われた。

工事には砂持や堤防補強などで多くの人足が地域の大仏柳原庄本村や、銭座跡村（「エタ」村である）や七条水率小屋（「ヒニン」の長屋）から動員された。

その際、町奉行所から村々へ「川のところどころを自由に往来できるように投渡橋をかけよ」との指示が出された。本村の人々は「水路が高く、流れも速いので、水が引くまでお待ち下さい」とすぐに応じなかったが、七条水率小屋の人々は水際の作業に慣れており、その日のうちに資材を運び込み、「投渡橋」を完成させた。

### 投渡橋：

岸と岸のあいだに板を投げ渡し、材木と縄で固定するだけの簡易な橋



研究センター研究員  
奈良県文化資源活用課会計年度任用職員  
小林ひろみ

「今村家文書」については、これまでも、この「グローブ」誌上で度々紹介されています。この度は、この文書群から、鴨川浚（普請）と呼ばれる幕末の洪水対策に関する史料によって明らかにされた被差別民の動向についてご紹介します。

近世後半の今村家は、代々大仏柳原庄と呼ばれる村の庄屋を勤めました。この村には、近世の間に五つの被差別民の集落が成立しましたが、そのうち、「今村家文書」によく登場するのは、年貢地で、大仏柳原庄本村（以下本村と略）の枝村であった「エタ」村の銭座跡村とその出村、そして、度々本村の仕事を請け負った七条水率小屋

屋と呼ばれる「ヒニン」の長屋です。この度ご紹介するのも、この三か所の事例です。

その前に、鴨川浚（普請）について、簡単にご説明しておきましょう。鴨川浚（普請）は、安政三年（一八五六）に行われた京都の官民挙げての土木工事です。近世に入り、いっそう川床の上昇が進んだ鴨川は、弘化～嘉永年間（一八四四～五二）には、一～二年毎に大洪水を繰り返し、田畑の浸水、家屋の浸水や流出、橋の流出、そして人命の犠牲をもたらしました。そのため、地域住民・領主層・町奉行所のいずれもが早急の対策を訴えて、その結果、幕府・町奉行所の主導で、川底の土砂の浚渫・堤防の修理と補強、川幅の狭い場所の拡幅工事などが行われたのです。

工事の費用は、幕府や領主も負担しましたが、不足分は富商の寄付と村や町の負担で補いました。また、この工事では多くの職人も雇われましたが、砂持と呼ばれる浚った土砂を運ぶ作業や、堤防の補強に使う粗集を集める作業などには、地域住民が動員されました。

それらの負担は、年貢地である銭座跡村とその出村にも課せられ、また、七条水率小屋も、周辺の村々を通して様々な工事関連の仕事の請け負っています。ここでは、それらの中から二つの事例をご紹介します。

## 崇仁高瀬川保勝会の問題

2020年2月、崇仁小学校の解体のため、《崇仁テラス》の資材置き場と川掃除道具置き場を小学校内から外に出すよう、京都市から求められた。

＊崇仁高瀬川保勝会

2017年設立。月1回の高瀬川の清掃活動や《崇仁テラス》の設営などを軸に、さまざまな活動によって崇仁地域のまちづくりをはかっている。

《崇仁テラス》 2020年4月6日



そこで、京都市の管轄である崇仁第二浴場の敷地の奥の高瀬川沿いに新しい資材置き場を設けることを京都市すまいまちづくり課に提案。交渉の結果、時限付きながら無償で提供されることになった。



現・資材置き場（元崇仁小学校体育館西側）



高瀬川保勝会物置（川掃除用具他、同南側）



崇仁第二浴場の敷地の奥。  
金網の向こうは高瀬川が流れる。  
新幹線の高架下。

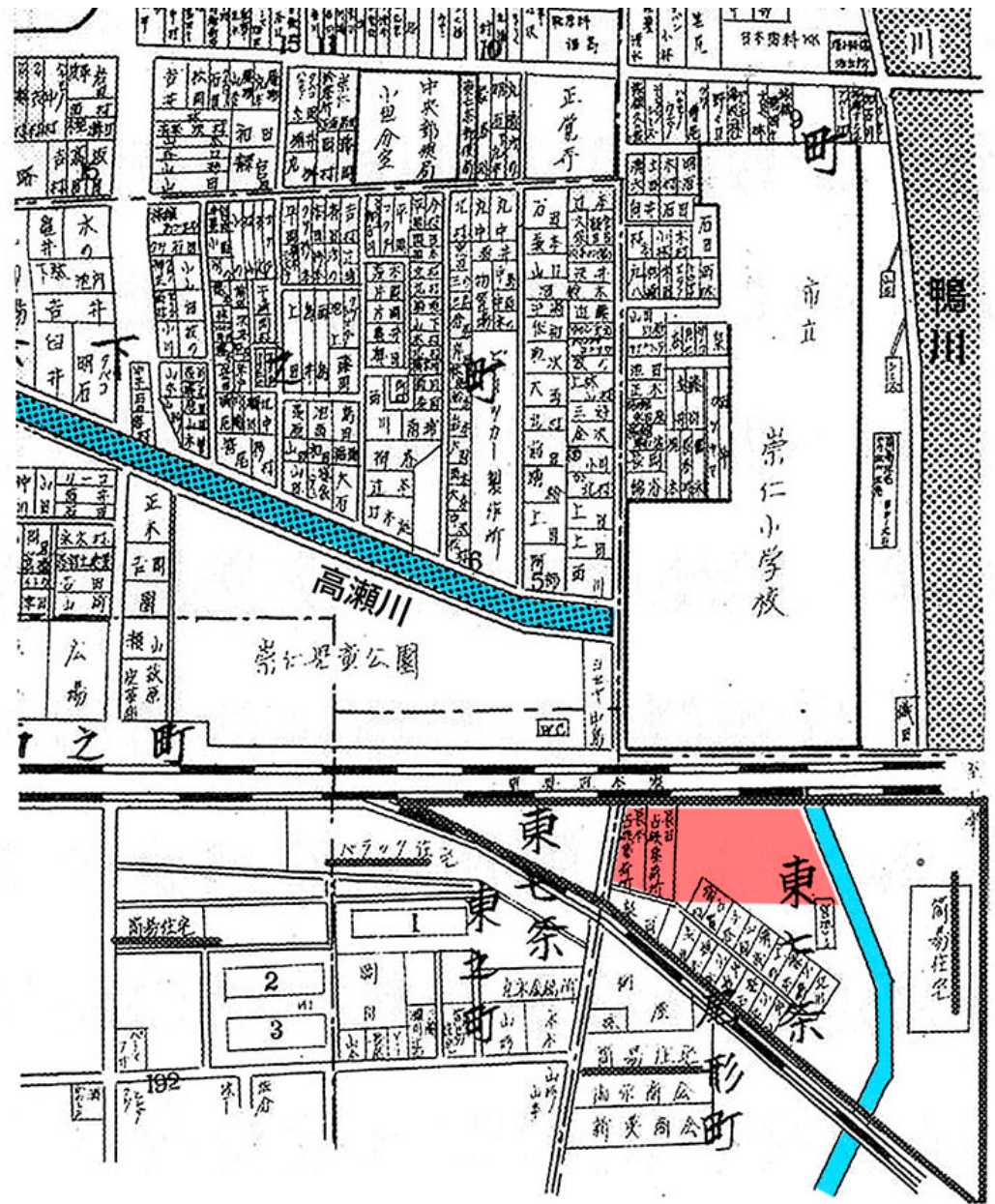
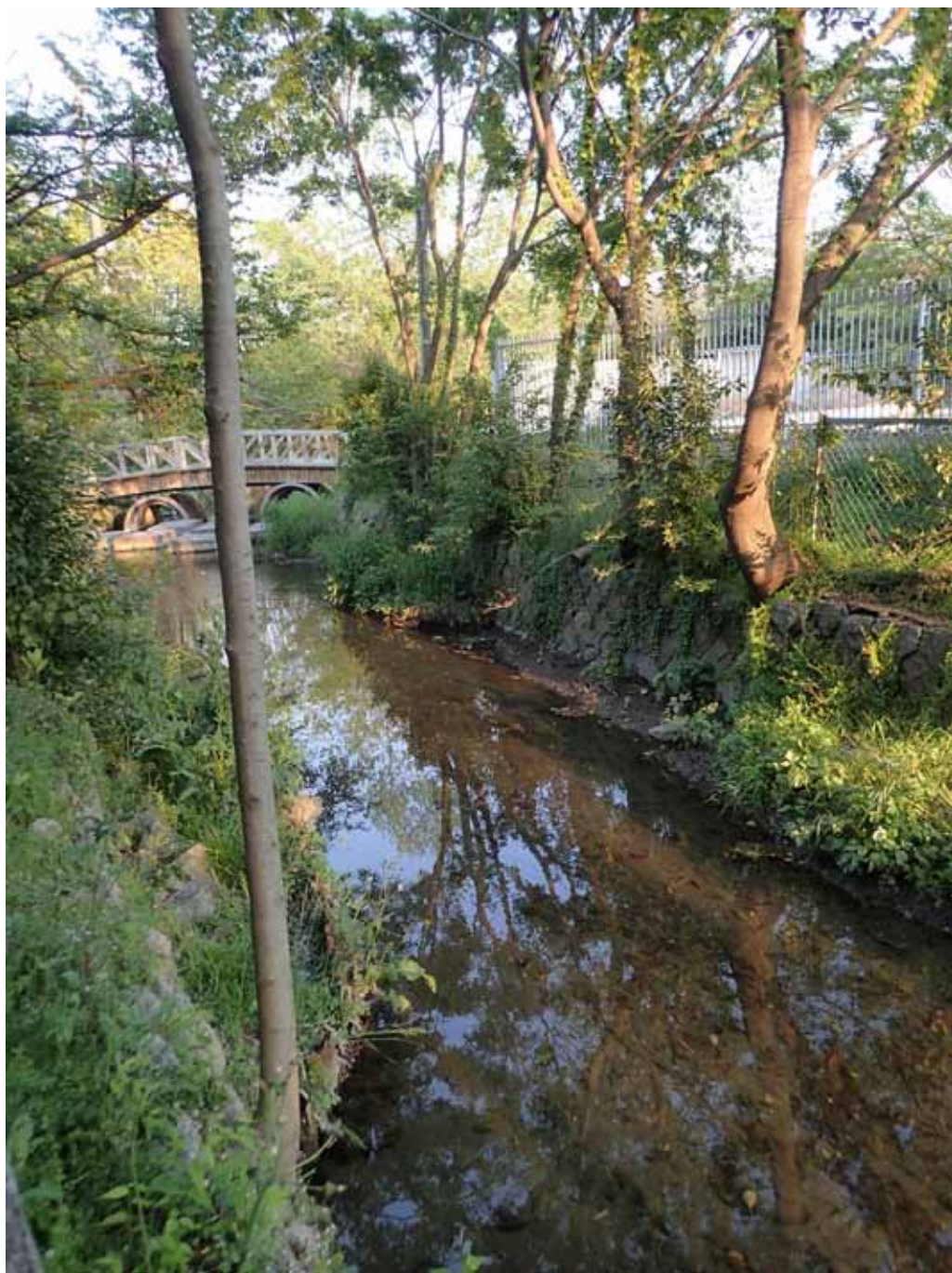


図1-4 『京都市全商工住宅案内図帳』  
(下京区、1960年)

新しい資材置き場は新幹線敷設（1964年）までスラムが広がる土地だった。



小屋づくりには、輸入材が大半の材木を買うのではなく、崇仁小学校内の高瀬川沿いに生えている樹木を使うことにした。





南洋の木は重く、肩に食い込んだ。坂を下り、谷を渡り、川を越え・・・



斧 (parang) 一本であらゆる加工をやっのけるアト棟梁 (78 歳)

cf. <https://fksk.amebaownd.com/>



材木を買わずに直接周囲の環境（高瀬川沿い）から入手する。  
世界がそのまま材料の山になり、生きた資源のなかに入ったように  
感じる。



「資源」とは、本来、辞書にあるように「人間が利用できるもの」  
ではない。逆に「人間を生かしてくれるもの」のことだと知った。  
「芸術資源」＝人間と芸術を生かしてくれるこの世界全体を指す。



収納し終わった《崇仁テラス》と掃除用具物置（右）



京都市のすまいまちづくり課が崇仁自治連合会の資材の物置も設置した。市有地が地域の住民活動を支える commons 的な場に転化されたことになる。



新幹線が走るかたわらには、いまだバラック住まいを続ける人たちの集落があった。1965年8月4日（朝日新聞）。

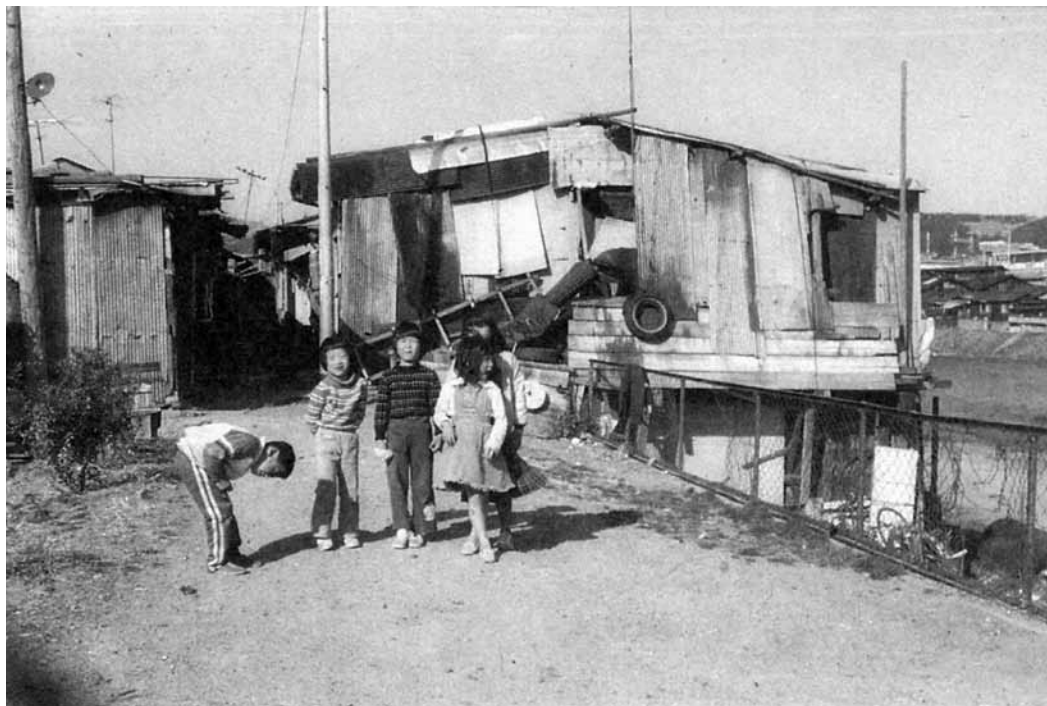
<http://www.asahi.com/special/train/2014shinkansen50/kage.html>



陶化橋から撮影された東九条40番地（1989年5月）。九条通り～十条通りのあいだの鴨川と高瀬川に挟まれた二重堤防部分、南北800mの土地に多いとき（1970年代半ば）には300世帯約600人が暮らしていた。8割ほどが在日の人たち。

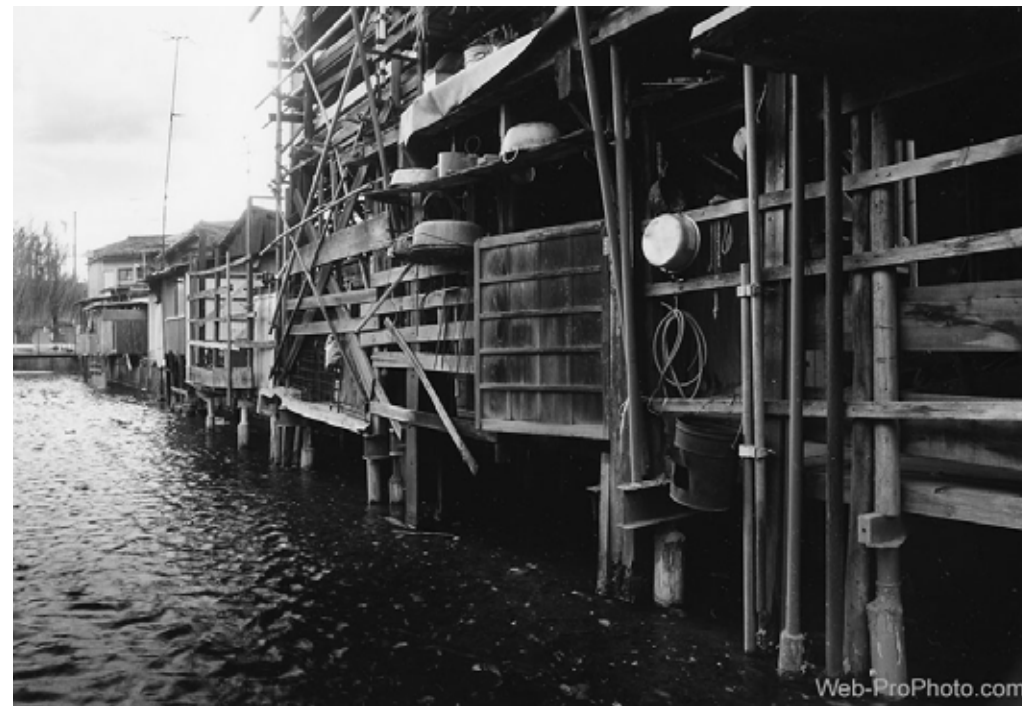
「0番地」とか「ていぼう」と言われ、「不法占拠地域」とされた。

『東九条の語り部たち～14人の聞き取り報告』京都市地域・多文化交流ネットワークサロン、2017年、第3版、p.147



密集していた 40 番地の一部が火事で空き地になり、子供たちの遊び場になった。1978 年

『東九条の語り部たち～14人の聞き取り報告』京都市地域・多文化交流ネットワークサロン、2017年、第3版、p.173



高瀬川にせり出して建つ高床式のバラック住居群。

高野経将『川の辺の町京都』より



鴨川の洪水におそわれる東九条 40 番地（1983 年 9 月）  
（柳原銀行記念資料館 2019 年特別展「自主映画『東九条』の世界 2」から）

40番地（別称0番地）は、下水も完備していない劣悪な環境条件ではあったが、内側にはおおらかでクリエイティブなブリコラージュと相互扶助の精神が息づき、モノ・人・空間の可変的で豊かな関係性が展開していた。

### 証言から：

『東九条の語り部たち～14人の聞き取り報告～』

京都市地域多文化交流ネットワークセンター、2017年、第3版

#### バラックづくり

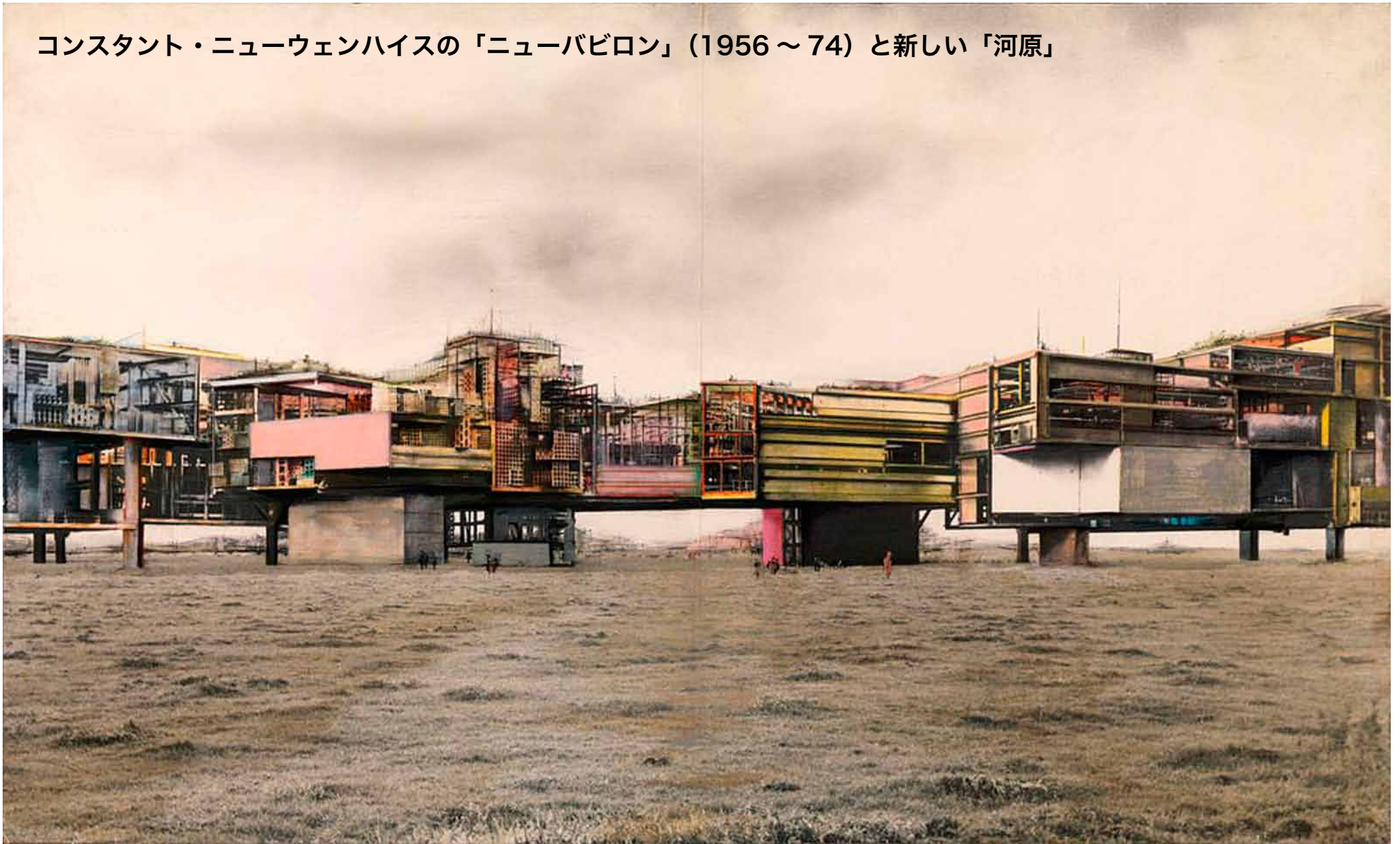
「家は自分で建てた。その後周りの家何件かもつくってやった。茶色いうてな、一番に燃やすようなやつを集めて、その他の材料は買ってきてもらって建ててやった。その頃は今とちがって金もなければ材料もない。大工使って金かけてつくるなんてしなかった。来た頃は家は3軒か4軒しかなかった。他の家は、雨をしのげればいいとバラックを自分で建てて住んでいた人が多かった。」(李楽善さん)  
p192

#### 東九条の移り変わり

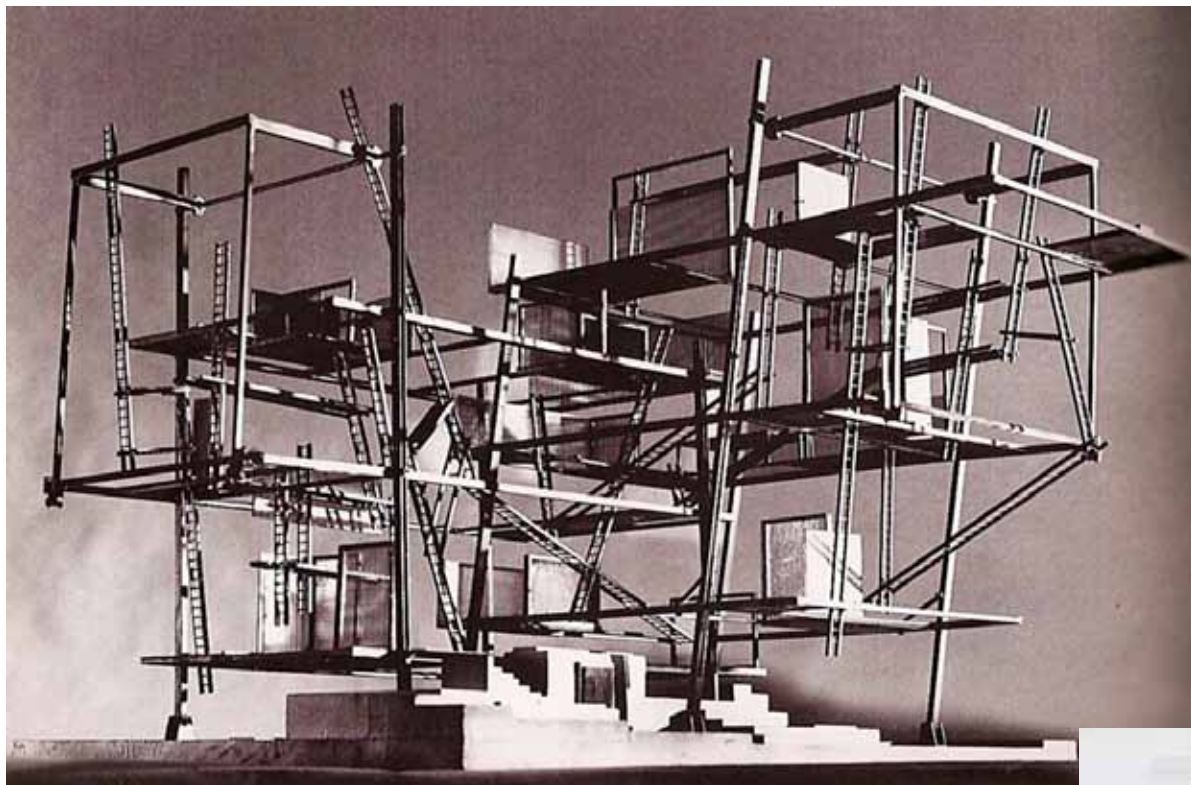
「まちも凄く変わったよ。高瀬川もね。「みやま」の八百屋、あそこが良く流行っててね。野菜なんかね。良く売っていたの。それで野菜の皮やくずを皆が川へ流すねん。今建っている真ん中位にね、小さな橋があつてね、そこを越えたら、木村という豚屋があつて、豚を飼っていたのね。それでそこでお爺さんがね、川の端に座つてね、引っ掛けるねん。野菜から白菜でも、何でも豚の餌になるから。あそこから流れてくるもの、食べ物全部引っ掛けて、それで入り口で豚の餌を炊いたの。あんな時分、皆もう川へ。誰もやかましく言うてないもの。

主人が高瀬川に柵を立てて囲みを作りアヒルを飼っていたんや。家の中で飼いなれないから川へ置いて行ったら何か食べてそれでしばらくして、「おーい」と呼ぶやろ。そうしたら集まつてくるねん。それで主人が階段つくって、そうしたら階段上がってくるの。手をたたいて呼んだら家に帰って来るの。それで私もう嫌いやった。公園の側で鶏も飼ってた。主人そんな無茶なことをやるのやからね。そんなんでも周りはやかましく言わなかったわ。」(吉岡美栄子さん)  
p.104

## コンスタント・ニューウェンハイスの「ニューバビロン」(1956～74) と新しい「河原」



オランダの画家コンスタント・ニューウェンハイス Constant Nieuwenhuys (1920-2005) のユートピア的な都市プロジェクト「ニューバビロン New Babylon」(1956～74) は、「0番地」である。

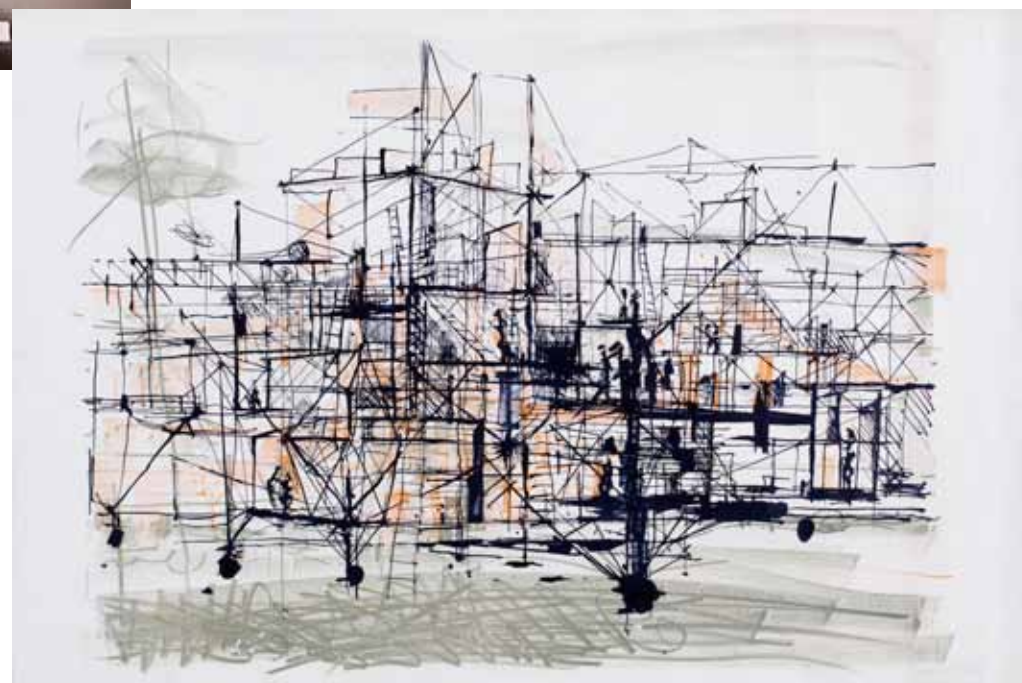


ニューバビロンは、住民どうしの遊びや工作、共同作業によって形づくられる集団的作品。そこでは土地や材料の私有が回避され、労働、定住、家族、国家という概念が消え失せる。トップダウン型の都市計画ではなく、誰もがアーティストとなってブリコラージュ的にかたちづくるボトムアップ型の住環境集成態。

いみじくも高瀬川沿いに数百 m にわたって浮かび林立する「0 番地」に似ていないか？

コンスタントはもと CoBrA に属した画家。  
50 年代にオルタナティブな都市のあり方を追求した Situationist International やアンリ・ルフェーブルの思想に触発され、1956 年から 20 年近くにわたって、ドローイングやコラージュ、地図、模型、彫刻による都市モデル「ニューバビロン」の形象化を展開した。

\* <https://stichtingconstant.nl/>



2020



2030



## 崇仁～東九条の 2030 年

気候変動によって再び氾濫を繰り返すようになった鴨川が、地域を新しい「河原」に変える。

そのとき公共空間は、人と動植物が共に元気になるための「工作・耕作・交流・表現の空間」となる。

（屋形町の市有地の活用の全面化？）

### 流出する《テラス=京都芸大》

↓ ↓ ↓ ↓ ↓

地域社会全体が壁のない、学費も単位もない「芸術大学」となり、クリエイティブな人材を生み出し続ける。

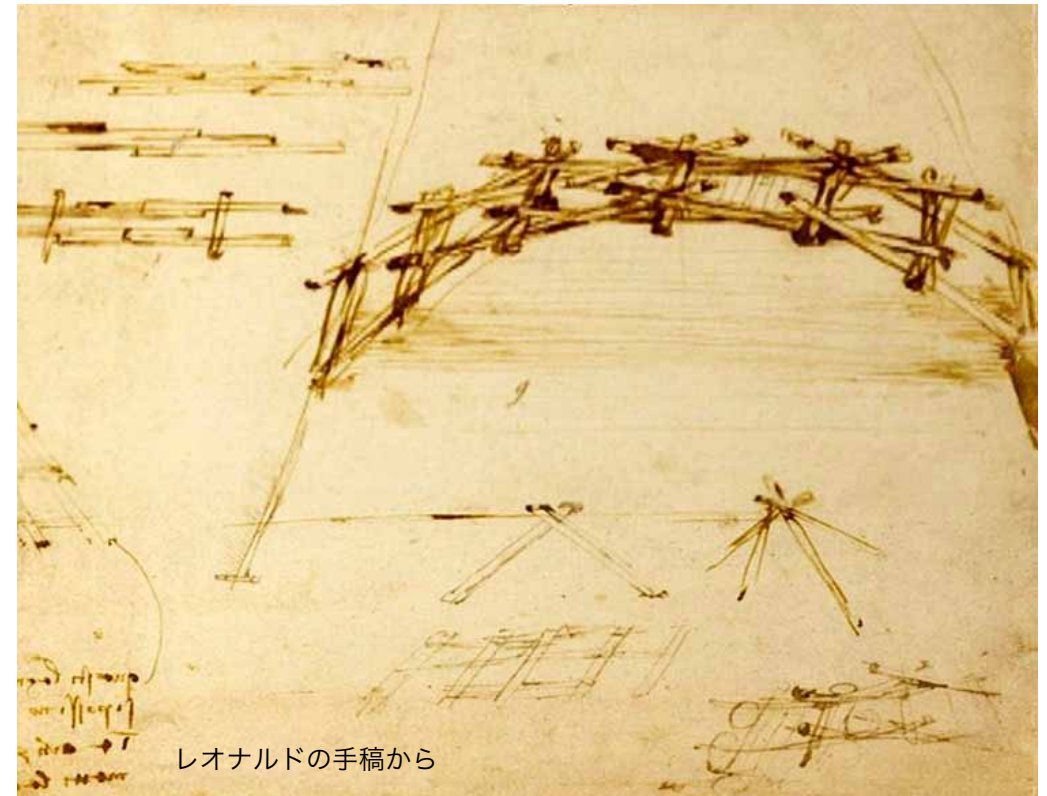
「河原」となった新しい社会で人々がまず身に付けるべきは、七条水車小屋のヒニンたちの投渡橋のように、「橋をかける」**技術**だろう。

「橋」とはこちらとあちら、異なる次元の「岸」／「端」をつなぐ装置である。上下をつなぐ「階段」は、二足歩行する人類のために「刻まれた橋」＝「きざはし」である。

コンスタントの「ニューバビロン」に描かれたように、新しい河原には、手づくりの橋と階段があちこちに散在して、人々は異なる次元を行き来する。

再びレオナルドへ。

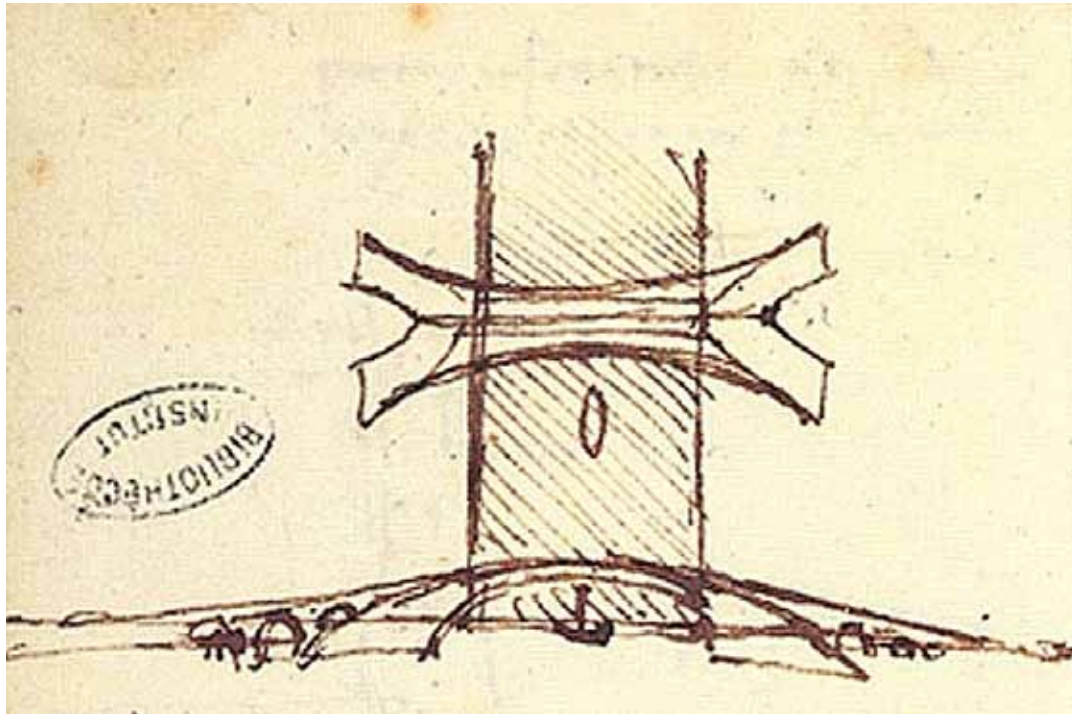
彼の手稿に、部材を固定しない橋づくりのアイデアがある。



レオナルドの手稿から



自分でもやってみた。

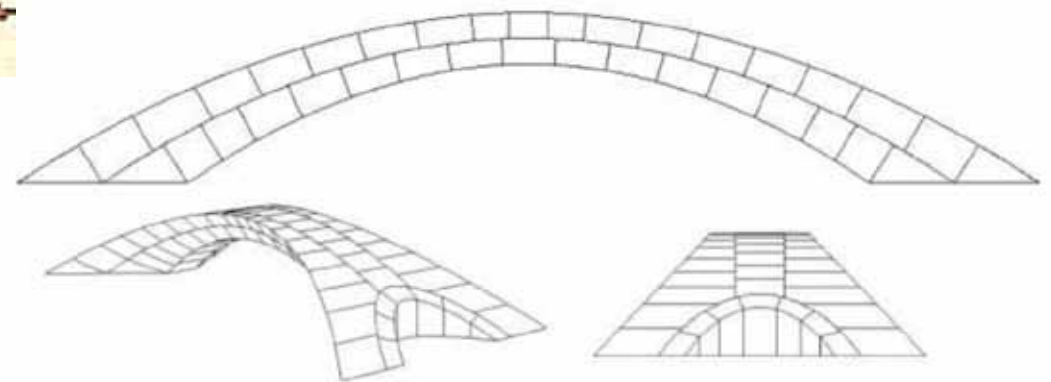


レオナルドの手稿から 「橋」 の設計アイデア

彼はイスタンブールのボスポラス海峡にかける全長 240 m 橋のアイデアをスルタンに提案していた。



ボスポラス海峡にかけられたレオナルド・ブリッジの想像図



MIT のデザインラボによるレオナルドの橋の検討

<https://news.mit.edu/2019/leonardo-da-vinci-bridge-test-1010>